新島八重子夫人と安中ご来訪について

二期生　淡路博和

▼過日、平成二十五年度ＮＨＫ大河ドラマに、新島襄先生の奥方である八重子夫人を主人公とする「八重の桜」が決まったとのニュースが流れると、俄然安中でも八重子夫人のことが話題になってまいりました。そこへ同窓会「根笹」編集部からの依頼もあり、良い機会でもあるので、改めて八重子夫人のこと、ことに安中との関係などを調べてみました。

まずお名前は、八重なのか、八重子なのかということですが、長年江戸期のことを調べている観点から言えば、江戸期や明治初期には一般的には「子」は付けておりません。明治時代になっても、なかなか「子」は付けませんでした。ただ、私たち新島学園に連なる者としては、新島先生の奥方としての彼女ですから、ここでは八重子夫人と呼ぶことにいたします。

▼八重子夫人は、弘化二年（一八四五）十一月三日（陽暦十二月一日）会津藩の山本家に、父山本権八・母さくの三女として生まれました。長兄は山本覚馬といって、後に新島先生と同志社を結成いたします。長女と次女及び次兄は早世し、弟に三郎がおります。山本家は武田信玄の軍師山本勘助の末裔といわれ、家格は藩中の黒紐席と称する上士の地位にあり、代々会津藩の砲術師範を勤めておりました。兄覚馬の影響もあって八重子夫人は蘭学と砲術を学び、「十三歳の時に四斗俵（約六十キロの米俵）を四回も肩に持ち上げた」そうです。十九歳の頃に、山本家に寄宿していた但馬国（兵庫県）出石（いずし）藩の洋学者川崎尚之助と結婚しました。

▼ところが慶応四年（一八六八）（明治元年）、会津藩は歴史的大事件に遭遇いたします。皆様ご存知の鳥羽伏見の戦いから始まった戊辰（ぼしん）戦争です。この戦争は薩長を中心とする新政府側の倒幕軍と、幕府に組みする旧幕府軍との戦いです。会津藩では藩主松平容保（かたもり）が、かつて京都守護職という幕府の要職にあった関係から、佐幕派の奥羽越列藩同盟の中心となり、

← 落城後の会津若松城（鶴ケ城）天守閣

そのため同年八月二十日（陰暦）から、板垣退助率（ひき）いる倒幕軍との間に悽愴（せいそう）な攻防戦が展開されました。

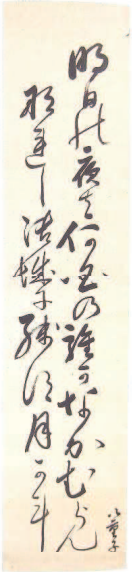
この時、八重子夫人は二十二歳。断髪して、しかも弟三郎の形見の軍服で男装、大小の刀を腰に帯び、時には七連発のスペンサー銃を持って大砲隊の指揮をとり、敵軍を悩ませたとのことです。まさに女丈夫、男まさりの勇姿が眼に浮かびますね。後に会津のジャンヌ・ダルクと言われたのも宜（うべ）なるかな、といったところです。

主力隊は城外で戦ったため、城内には婦女子・老兵・少年兵しか残っておらず、新政府軍の攻撃に戦死者続出、遂に落城、降伏いたしました。父は戦死、夫尚之助は藩籍を持たぬため城外に脱出し、離婚いたしました。

城を退去する夜、八重子夫人は「戊辰長月（旧暦九月）二十日あまり三日の夜、さしのぼる月のいとさやけなるを見て」、つまり九月二十三日の夜、三の丸の雑物庫の壁に簪（かんざし）で刻み付けたのが、左の短歌です。

明日の夜は何国の誰かながむらん
なれし御城に残す月かげ

八重子



→ 右はのちに清書したもの。

戊辰戦争が峠を越した十一月、新政府は朝敵藩の処分を行い、その対象は二十三藩にも

及んだそうです。会津藩二十三万石も没収されましたが、明治二年（一八六九）家名再興が許され、下北半島に斗南（となみ）藩三万石（青森県むつ市）の領地が与えられ、多くの旧藩士とその家族一万七千人程が移住し、風雪厳しい土地で辛苦の生活を送ることになったのです。

▼明治四年（一八七一）二月、戦死したと思われていた兄覚馬が京都府顧問をしているという知らせを聞いて、母さく・姪みねの三人で京都に移りました。八重子夫人の新しい生活への門出です。兄覚馬は薩摩藩に捕らえられ、眼疾を患い失明致しましたが、彼の識見の高さから厚遇され、のちには京都府議会議長にもなった人物です。

←兄山本覚馬氏

八重子夫人は兄覚馬から英語を学び、洋髪洋装の女性に生まれ変わったと言われています。

明治五年（一八七二）兄の紹介で我国最初の女学校「女紅場（じょこうば）」（現京都府立鴨沂（おうき）高等学校）の舎監兼教師として働き、そこで茶道教師の裏千家十三代目千宗室（せんそうしつ）（円能斎（えんのうさい））の母と知り合って茶道に親しみ、また英語を媒介として聖書の研究を始め、キリスト教に関心を持つようになりました。

▼明治七年（一八七四）に帰国した新島先生が、京都に学校を建てようと京都府顧問の山本覚馬氏に近づき、八重子夫人は新島先生が一時逗留していた旅館「目貫屋（めぬきや）」に兄の紹介で聖書の勉強に通い始め、お互いに惹かれるようになったようです。かつて父民治さん宛の手紙の中で、「日本の女性の如くなき女子」を妻に迎えたいと述べていた新島先生ですので、自由闊達にものを言う八重子さんに注目したのでしょう。

こうして八重子夫人は明治九年（一八七六）一月二日、デヴィス邸にて同氏から洗礼を受け、翌日同氏の司式で結婚式を挙げました。京都で最初の洗礼、キリスト教式の結婚式でありました。新島先生三十二歳、八重子夫人三十歳。正しいと思うことは自らこだわりなく実行するという、八重子夫人の面目躍如たるものがあります。

←結婚後間もない頃の新島ご夫妻

▼山本覚馬・デヴィス氏等の協力で、明治八年（一八七五）十一月、同志社英学校が開校されました。この時の入学生はたった八名でした。ところが私たちの新島学園が昭和二十二年（一九四七）五月に開校した時の最初の入学生は、一期生・二期生合わせて八十二名でした。当時の学園の先生方が「新島先生が学校を開いた時の入学生が八名、それに比べ、その十倍の生徒が与えられた。感謝するとともに責任を感じます」と語っておられたのを私は覚えています。

▼明治十年（一八七七）に同志社分校女紅場（のちの同志社女学校）が開校すると八重子夫人は礼法を教え、母さくさんは舎監となり、山本家あげて新島先生を支えました。八重子夫人は洋装にブーツを履き、夫と並んで人力車に乗り、花飾りのある帽子を被り、和服に靴を履く・・・京すずめには「悪妻」「烈婦」として嫌悪の目で見られましたが、彼女はどこ吹く風と気にもとめなかったようです。

←明治二十一年十一月撮影の八重子夫人

▼明治二十三年（一八九〇）一月二十三日、神奈川県大磯の旅館「百足屋（むかでや）」にて、新島先生は四十七歳の生涯を閉じました。結婚生活十四年。同志社大学建設のため全国を行脚しつつ療養する夫の身体を気づかい、夫に付き添って会津・鎌倉・伊香保・神戸・北海道等へと出向かれました。それは結婚生活の三分の一にも達したとのことです。

左は八重子夫人が「夫のみまかりける年の春」に詠んだ歌です。

○ 大磯の岩にくだくる波の音の
　まくらにひびく夜半ぞかなしき

○ ひとりねの寝覚の床は春雨の
　おときくさへもさびしかりける

○ 心あらば立ちなかくしそ春霞
　み墓の山の松のむらたち

▼新島先生なきあと、明治二十四年（一八九一）には日本赤十字社の正社員となり日赤篤志婦人会に加入。ことに日清・日露戦争の時には、篤志看護婦として広島や大阪で負傷兵の救護活動に従事し、皇族以外の女性としては初めての叙勲を受け、昭和三年（一九二八）昭和天皇即位の大礼に際しては銀杯を授与されました。

←明治三十八年　篤志看護婦会正装の八重子夫人

また夫の遺産の全てを同志社に寄附され、円能斎（えんのうさい）直門の弟子として「新島宗竹」の名を授かり、茶道裏千家の普及に努めておりました。私邸でカルタ会を開き、多くの生徒たちから「新島のおばあ様」と親しまれていたとのことです。

▼ところが昭和六年の後半から度々激しい腹痛を訴え、医師の診察を受けておりました。それでも昭和七（一九三二）年元旦の自詠では、

○幸多き年来にけりと諸人に
　あかつき告ぐるくだかけの声

また同年の米寿祝賀の時にも、

○あしたづのなくをききつつうれしくも
　米てふ文字の年を迎へぬ

と詠い、幾分小康を見せたこともありましたが、昭和七（一九三二）年六月十三日、茶筵の後に病状激変、六月十四日午後七時四十分、京都寺町の新島邸で急性胆嚢炎（たんのうえん）のため永眠されました。同月十七日、同志社葬により京都若王寺の新島家墓域に葬られ、八十六歳七か月の天寿を全うされたのです。

同年七月十五日発行の「同志社校友同窓会報」慶弔号に、安中出身の詩人湯浅吉郎氏（号半月）が「新島刀自（とじ）の永眠を悲しみて」

○ 五月雨はいかに降るとも小（お）やみなき
　我涙にはおよばざるらん

と、永訣の悲しみを詠っております。

◆　◆　◆

▼さて、次に新島八重子夫人の安中ご来訪について記してみます。今後の研究によっては補充訂正されるかも知れませんが、私のささやかな調査では、八重子夫人は安中に四回ご来訪なされております。

第一回目　明治　十五年七月
第二回目　明治二十一年八月
第三回目　明治四十三年一月
第四回目　大正　十　年八月

▼第一回目の安中ご来訪　御年三十六歳

新島襄全集８「年譜編」より、その概略を引用してみますと、

「明治十五（一八八二）年七月三日、新島先生と徳富猪一郎・湯浅吉郎・他三名は京都より会津へ向けての旅に発（た）ち、中山道を通って七月十一日夜八時安中に到着、八重夫人に迎えられて湯浅治郎宅に泊まり、徳富氏らは伝馬町の山田屋旅館に泊まった。八重夫人は女性二人を伴い神戸より海路、横浜を経て安中に先着していた。新島先生たちは安中・原市・松井田で演説会を開き、その間をみて親戚にあたる植栗家や鷺宮の佐藤種五郎家を訪ねた。（佐藤家には新島先生の姉真規が嫁いでいた）。一行は七月十八日安中を発ち、太田・栃木・日光・白河を経て七月二十七日会津若松に到着、長旅を経て九月十五日に京都に帰られた」

とのことであります。この時、八重子夫人は初めて安中に来られ、そして懐かしい故郷会津へと旅をしたのであります。どんな感慨を抱いたことでありましょうか。

▼第二回目の安中ご来訪　御年四十二歳

同じく新島襄全集８「年譜編」より、その概略を引用してみますと、

「明治二十一（一八八八）年四月十六日、京都を出発した新島先生は神戸・横浜を経て鎌倉到着。六月八日鎌倉に来た八重子さんと落合い、三日間ほど静養する。東京に戻り、七月二日八重子夫人が秘かに夫の病状を医師に聞くと、『心臓病は全治を期すことは出来ない』とのこ

と」。八重子夫人の心中いかばかりであったろうか。それでも新島先生は実に多くの名士と会見し、沢山の手紙を認めています。それは本当に目まぐるしいほどであります。

「静養のため七月二十七日、伊香保の木暮武太夫方に到着、八月六日には千明三郎氏の別荘に移る。京都に戻っていた八重子夫人が八月十六日に伊香保に来る」。この間も新島先生は岩崎弥之助氏（岩崎弥太郎の弟）などの名士や地元の信者たちと会い、勝海舟・陸奥宗光・内村鑑三など諸氏との手紙の交信を行っています。

「九月十五日、二人は伊香保から前橋へ。九月十六日、八重子夫人は安中へ。そして翌日は新島家の養子新島公義さんの実家（松井田の国衙）へと出向きました」。養子公義さんの結納の件であったようです。

その後の動静は記してありませんが、九月二十五日には新島先生は東京に帰っていますので、八重子夫人も同行したと思われます。当時の新島先生は、組合・一致両教会の合同問題について心労の多い時期でありました。

▼第三回目の安中ご来訪　御年六十四歳

明治四十三（一九一〇）年一月に安中教会で、新島襄先生永眠二十周年紀年会が催され、その時の記念写真（↓）が新島学園に遺されています。旧安中教会堂の玄関前で撮った写真で、裏に「安中町本多写真館」の印が押されています。

写真は向かって右から、山室軍平氏、八重子夫人、ジェローム・デヴィス博士、小崎弘道氏の皆様で、山室氏は日本救世軍の創立者として有名。デヴィス博士は新島先生が同志社結成時の同志のひとりで、八重子夫人結婚式の司式者でした。小崎氏は熊本バンド出身で、新島先生亡きあと先生を継いで第二代同志社々長となり、のちには東京霊南坂教会牧師として活躍されました。

← 明治四十三年一月の記念写真

写真のような穏やかなお姿を拝見しますと、会津時代の勇壮な女丈夫の面影や、洋装のハイカラなイメージとはほど遠く、茶道を楽しむ穏やかな八重子夫人でありますが、押しも押されもしない凛とした風格が漂っておりますね。

明治という時代の中でしたが、近代女性の先駆者として、もっと注目されてもいいように思います。ＮＨＫのドラマと共に彼女の真骨頂が多くの人の共感を呼ぶのではないかと期待しています。

▼第四回目の安中ご来訪　御年七十五歳

安中教会柏木義円牧師編纂の「上毛教界月報」二百七十四号（大正十（一九二一）年九月十五日発行）の中に、「新島八重子刀自の御來安」の記事があり、次のように記されています。

「新島先生の奥様は山形より御帰途、（八月）廿八日午前十時廿八分着にて御來安、湯浅家の客となられ、礼拝に御参列、次で別館にて歓迎会を催ふし、その歓迎会の席上、八重子さんは、かつて新島先生が函館から脱出された時の話をされた。ニコライ師との会見のくだりでは、『あの時にニコライ師が新島に聖書を教えてくださっていたら、新島は米国には行かずにロシアに行ったであろう。そうすれば同志社も起こらなかったであろう。実に妙なる御摂理なりし』と八重子夫人は語り、さらに続けて、

「脱国を助けてくれたポーター商会の福士宇之吉氏は、夫を沖合に停泊中のベルリン号まで届けるため、三日間も小舟の漕ぎ方を練習していたこと。のちに夫婦して函館に行った時に、新島が指さして『ここは雪駄を脱いだところ』『ここから小舟に乗った』などと

話してくれた。またポーターという古い名札の下がった家を見付け、今は零落したそこの主人に面会し、襄が『私は、貴商会の福士氏のお陰で米国に航海できて・・・』と話すと、その主人は涙を流して『我が社は当時函館第一流の雑貨商であったが、店員の不正によって破産してしまった。君が温情ある訪問をしてくれ、君の親切がうれしい』と喜ばれた。襄は若干のお金を差し上げてお別れした」と八重子夫人は語っています。

▼新島先生の愛弟子柏木義円牧師と安中教会の皆様を前に、七十五歳の八重子夫人は夫を追憶し、楽しそうに語られたのです。これが安中ご訪問の最後になったのではないでしょうか。

八重子夫人と新島先生・・・お互いに心を通わせ合った仲睦まじいご夫妻が、函館の浜辺を歩くお姿が目に見えるようですね。

（二〇一一・八・三〇　記）

註　掲載写真は一部を除き、同志社刊「新島襄　その時代と生涯」一九九四年版より転写させていただきました。参考文献は主に、昭和七年（一九三二）二月の「同志社校友同窓会報」第六十一号「新島八重子刀自米寿記念号」と、昭和七年七月の同会報第六十六号「敬弔」号です。なお文中の年齢は満年齢と致しました。

新島学園収蔵史料調査整理
ボランティアメンバー

淡路　博和	2期
白石　幸晴	9期
小板橋　治徳	11期
清水　博	11期
真下　正雄	15期

二〇一〇年一〇月五日（火）
調査整理開始以来
ほぼ週一回宛調査

この拙文につき疑問や訂正がありましたら、左にメールをいただけましたら幸いです。

awajii@sep.email.ne.jp
淡路　博和

夢故園花　学園収蔵史料紹介誌
第二号　（非売品）
発行日　二〇一一年九月一日
編集　秋池いづみ　新島学園
発行　淡路　博和
印刷　新島学園